

## 本当の優しさ

(原文)

池田 亮介 (13 歳)

千葉県

僕は今まで自分がしてもらって嬉しいことを相手にすることが、優しさだと思っていました。小さなことでも一人一人がそのような気持ちになり社会を優しさでいっぱいにするための、ひとつの大切なピースだと思っていました。でもそれだけでは充分ではないと考えました。

僕は小学6年生の時にクラスでこんな体験をしました。僕たちのクラスにはみんなで考えたクラスをよくするルールがありました。そのルールとは授業の始まる5分前には教科書を準備することや、自習時間にうるさくしないことなどです。しかしその約束を破る人などが出てきて、授業が時間通りにならずクラスの雰囲気が悪くなり、自習時間などにうるさくする人がいて、注意しても聞かないことが多くなり、けんかなどがよく起こるようになってしまいました。

僕は小学校での最後の時間をクラスメイト全員と笑顔で過ごしたい！そんな思いから、どうしたら、楽しく小学校生活を送れるかと考え、学級会を開きたいと思い先生に相談しました。そして学級会を開くこととなり、自分の意見を言うだけでなく、みんなでどうしたらそのような行動を改善できるのかと、耳を澄ましてみんなの言葉を聞きました。その意見はこのようなものです。「自分たちが楽しければそれでよいと思った。」とか、「ルールがあることを忘れて行動してしまった。」などの意見が出てきました。僕は、「みんなで仲良く小学校生活を終わりたいという意見を出しました。そして話し合いの結果みんなもバラバラで小学校生活を終わるより、6年2組というまとまりで終わりたいという意見で一致しました。

話し合ったことは僕がまとめてプリントにし教室の後ろの黒板に掲示しました。そのプリントには、みんな理解しやすいように工夫をしたり、興味を持って読んでくれるようにしました。例えばいま日本で流行となっている「チョコちゃん」というキャラクターを使ったり、見た人がただ読むだけでなく自分で考えることが出来るように問いかけの表現を使って書きました。

プリントを作った結果、掲示したばかりの時は「お前優等生ぶってんだろ」などと言われることもありましたが少しずつみんなの心に思いやりの気持ちが芽生え始めました。例えば最初は自分の仲の良い友達のことしか考えずクラス全体のことには関心を持てなかったクラスメイトが、教科書を配るのを手伝うことが出来るようになったり、自分のことを後にして待っているみんなのことを優先してくれるようになったりしました。

「優しいことが進んでできる人。その人を勇気があるといいます。友達やクラスのためにいろいろ頑張ってくれてありがとう。先生はいつも君に感謝をしていました。」これは卒業するときに、担任の先生が僕に仰ってくれた言葉です。

先生は僕がクラスのためにとった行動について、勇気があると言ってくれたのです。その時、優しさとは、その気持ちを実現するために行動をすることが大切なのだとあらためて思いました。そして、行動を起こすには勇気が必要だということも教えてもらいました。それらを忘れずにこれからも進んでいこうと決めました。

僕はこの経験から、自分が思いやりの気持ちをもって勇気を出して行動することによってみんなの心にも思いやりの気持ちが芽生えると知りました。そして、自分一人の小さな行動がクラスという大きなものを動かしたという事実から一人ひとりが小さな思いやりをもって、勇気を出して行動することによって社会を優しさでいっぱいにすることが出来ると自信をもって言えます。